JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	研究指導者からみたポスドクと大学院生(研究人材・人材育成)
Author(s)	加藤，毅
Citation	年次学術大会講演要旨集，18: 143-144
Issue Date	2003-11-07
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/6856
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般論文

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

1E06　研究指導者からみたポスドクと大学院生

○加藤　毅（筑波大大学研）

1．はじめに

平成8年7月に閣議決定された第1期科学技術基本計画で提唱された「ポストドクター等1万人支援計画」にもとづき、ポストドクター等の人数は大幅に増加され、平成11年度の段階で1万人という計画は達成された。その後平成13年3月に閣議決定された第2期科学技術基本計画では、「ポストドクトラル制度等の質的充実を図るとともに、その効果を評価する」という方針が示されている。同時に、理工系を中心とする大学院博士課程の整備・改善・充実も着実に進められてきている。

本発表では、日本全国の国公私立4年制大学の教員を対象として平成14年3月に実施した調査(注1)のデータを用いて、1)ポストドクター等の現状を明らかにするとともに、2)研究指導者からみたポストドクター等の評価について分析を行い、そして、3)学術研究のボーダレス化という大きな流れのなかでポストドクター等の果たしている役割を明らかにすることを目的とする。なお、調査の概要は表1に示す通りである。

表1　調査の概要

調査対象	；日本全国の国公私立四年制大学の、人文、社会、理、工、農、薬およびその他の分野の学部、大学院、附置研究施設等の専任の教授および助教授を対象とし、15,518サンプルを無作為に抽出（抽出率は40％）
調査時期	；平成14年3月
調査方法	；郵送による配付・回収
回収率	；16％（2,513票）

2．偏在するポストドクター

平成13年度に研究指導を行っているポストドクター（ポスドク）の人数についてみたものが表2である。回答者全体では、ポスドクを指導していない（0人）ケースが79％と圧倒的多数を占め、1人が13％、2人が4％、3～5人が3％、6人以上が1％である。その結果、平均人数は0.38人となっている。

分野別にみたところ、人文社会ではポスドクを指導していないケースが89％、ポスドクの平均人数は0.2人であるのに対して、理学ではポスドクを指導していない比率は69％と低下し、ポスドクの平均人数も0.57人と2倍以上となっている。さらに、同じ理学分野であっても年間研究費の規模によってポスドクの在籍状況は大きく異なる。すなわち、年間研究費が100万円未満ではポスドクの平均人数は0.04人、100万円～1,000万円未満でも0.4人に満たない。これに対して年間研究費が1,000万円以上ではその過半数がポスドクの指導を行っており、さらに3,000万円以上になると、平均1.88人のポスドクの指導を行っている。このように、研究分野や年間研究費の規模に応じてポスドクは大きく偏在していることがわかる。年間研究費の規模が大きな教員のもとに集中するという同様の傾向は、博士課程の大学院生についてもみられる。

表2　平成13年度に研究指導を行っているポスドクの人数

【大分野＊年間研究費】		0人	1人	2人	3人～	6人～	平均人数
人文社会	50万円未満	93%	5%	1%	0%	0%	0.08
	50～100万円	95%	4%	1%	1%	0%	0.07
	100～200万円	91%	7%	1%	1%	0%	0.10
	200～500万円	87%	7%	2%	3%	1%	0.25
	500万円以上	61%	17%	7%	11%	4%	0.91
	人文社会　計	89%	7%	2%	2%	1%	0.20
理学	100万円未満	98%	0%	2%	0%	0%	0.04
	100～300万円	84%	11%	2%	1%	2%	0.32
	300～1,000万円	72%	21%	4%	3%	0%	0.39
	1,000～3,000万円	47%	42%	9%	2%	1%	0.71
	3,000万円以上	33%	27%	12%	20%	8%	1.88
	理学　計	69%	20%	5%	4%	2%	0.57
工学	200万円未満	94%	6%	0%	0%	0%	0.06
	200～500万円	91%	8%	1%	0%	0%	0.11
	500～1,000万円	82%	12%	4%	1%	1%	0.29
	1,000～3,000万円	72%	21%	4%	3%	0%	0.39
	3,000万円以上	37%	23%	16%	21%	4%	1.46
	工学　計	80%	13%	4%	3%	1%	0.34
全　体		79%	13%	4%	3%	1%	0.38

3．研究指導者からみたポストドクターの評価

多数を占めているフェローシップ型の日本人ポスドクに対する研究指導者の評価と指導状況についてみたものが表3である。平成13年度にフェローシップ型の日本人ポスドクを指導していた185名

表3 ポスドクの質の評価（日本人フェーローシップ）

	1.世界ﾚﾍﾞﾙ	2.独力	3.ﾃｰﾏ必要	4.要指導	5.支援者	Total
人文社会	9%	32%	14%	27%	0%	22
理　学	21%	25%	29%	9%	1%	76
工　学	15%	37%	29%	10%	0%	41
全　体	17%	28%	28%	11%	1%	185

1.世界で通用する高い研究能力を持っている
2.優れた研究成果を独力で生みだす能力を持っている
3.適切な研究テーマが与えられれば優れた研究成果を生みだす能力を持っている
4.研究成果を得るためには研究指導が必要である
5.研究支援スタッフとしてはすぐれている

のうち、「1.世界レベル」と評価するのは17%、「2.独力」および「3.テーマ必要」が共に28%、そして「4.要指導」と回答するものの比率は11%となっている。分野別にみると、理学では「1.世界レベル」が21%と高くその代わりに「4.要指導」の比率が9%と低い。これとは対照的に、人文社会では「1.世界レベル」が9%と低くその一方で「4.要指導」の比率が27%と高くなっていることがわかる。

4．ボーダレス化のなかのポストドクター

本調査プロジェクトの最大のテーマは、『学術研究のボーダレス化』；国境や設置主体、ディシプリンなどの既存の主要なボーダーが希薄化し、1.学術研究活動のグローバル化、2.学術研究のイノベーションシステムへの接近、3.学術研究の学際化、という変化が起きているのではないか、という仮説を検証するところにあった。データの分析を通じて、特に研究のアクティビティレベルの高い研究者を中心として学術研究のボーダレス化という変化が進展していることが明らかになった（『大学研究』第27号）。ポスドクおよび大学院生の存在もまた、『学術研究のボーダレス化』という変化と無関係ではない。

注1 ;平成12-14年度文部科学省科学研究費補助金特別研究促進費(1)「研究資源の供給と研究成果との関係についての調査研究」（研究代表者　山本眞一）。なお、本調査研究での分析結果については、『大学研究』第27号（筑波大学大学研究センター，2003）を参照。